自由を求めつづけた「見事なる敗北者」長谷川濬の初の評伝！

満洲浪漫
――長谷川濬が見た夢――

大島幹雄

「ドン・コザック合唱団を日本に呼ぶ」

荻窪にある十五畳のアトリエを兼ねた神彰のアパートでは、いつものように三人の男たちが酒を酌み交わし、口角泡を飛ばしながら議論をたたかわしていた。一九五四(昭和二十九)年の秋のことである。

ひとりは、この部屋の主である神彰。画家をめざし函館から上京して三年になるが、乾いて散らばっている絵の具と、途中まで描いたまま打ち捨てられているカンバスが物語っているように、絵描きとして生きていくことに自信を失いかけていた時であった。もうひとりは岩崎篤、あだ名は将軍、元満洲国治安部の軍人であった。そしてあとのひとりは長谷川濬、元満洲映画協会社員で終戦の時甘粕正彦理事長自決の現場に居あわせていた男、戦前本土でもベストセラーとなった白系ロシア人作家バイコフが書いた『偉大なる王』の翻訳者、作家の海太郎、四郎、画家の潾二郎を兄弟にもつ男、そしてこれから私が語ろうとしている物語の主人公である。

男たちは議論に飽きると、酔いにまかせて歌をがなりたてるのが常だった。ある日長谷川が、突然ロシア民謡を歌いはじめた。

「山々には黄金のうずもれている
ザバイカルの荒野をとおって
さすらい人は運命をのろいながら
背負袋を肩にさまよう
彼は密林を歩いてゆく
そこでは小鳥が歌っているだけだ
腰につるした鍋が鳴り
乾パンとスプーンがぶつかりあう
……」

「バイカル湖のほとり」であった。

シベリアの凍てつく荒野を漂う哀愁が、三人の男たちの脳裏に満洲の荒野をよみがえらせる。何をしていいかわからない、ただ酒を飲み、憂さを晴らすしかない男たちの胸に、この歌は何かを訴えかけてきた。

長谷川がふとつぶやいた。

「ドン・コザック合唱団を日本に呼ぶっていうのはどうかな」

木製のベッドにゴロリと横になり、天井を睨みつけていた神が、むっくと起き上がった。「濬さん、それだ、ドン・コザックだ、ドン・コザック合唱団を日本に呼ぶんだ」

神はもう酔ってはいなかった。目は真剣だった。

でもどうやって、ドン・コザック合唱団を呼ぶんだ？（…）

遺された一三〇冊の大学ノート「青鴉」

「青鴉」と題されたノートが、戦後の長谷川濬を支えていたものだった。満洲だけでなく日本でもベストセラーとなるバイコフの『偉大なる王』の翻訳で一世を風靡し、満洲国では文芸界の中心人物であった長谷川だったが、戦後まったく忘れ去られた存在となった。戦後文学界の中心的存在に君臨していたのは弟の長谷川四郎の方であった。濬は『作文』『動物文学』『文学四季』といった同人誌に原稿料をもらうことなく、逆に会費を納めながら書き続けていた。そしてこうした作品の下書き、日々の感想、読んだ本の感想、見た映画の感想、詩の断片、小説の構想などを大学ノートに書きつづけていた。「青鴉」と題されたこのノート

▲長谷川濬（1906-73）

1906年，函館市に生まれる。兄弟は海太郎(作家)，潾二郎(画家)，四郎(作家)。29年，大阪外国語学校露語科入学。32年，大川周明の後ろ盾で，5.15事件の日に満洲に渡り，自治指導部訓練所(のちに大同学院)で訓練を受ける。卒業後，満洲国外交部に入り，チタ，満洲里，綏紛河などに勤務。37年，満洲映画協会に入る。38年，北村謙次郎，仲賢礼らと『満洲浪曼』を発刊。40年，『満洲日日新聞』でバイコフ『偉大なる王』の訳載が始まる(41年文藝春秋社より刊行，ベストセラーに)。42年，コザック小説を書くため三河協和会の嘱託となり，コザック村に滞在・取材，マクシム・ニコライウイチと名乗る。1945年 8月 20日，満映理事長甘粕正彦が自殺，その現場に立ち会う。翌8月，帰国。

戦後は貨物船のロシア語通訳など様々な職を転々とする。54年，神彰のアート・フレンド・アソシエーション設立に参加，「赤い呼び屋」神彰の片腕となる。56年，ドン・コザック合唱団を呼び，日本初公演を大成功裡におさめる。その後，結核の再発での入退院を繰り返しながら翻訳，ロシア語教師などをつとめ，73年 12月に死去。

著書に『鳥爾順河』(国民画報社，1944)『海』(私家版詩集，1965)『函館散文詩集　木靴をはいて――面影の函館』(大島幹雄編，mole，2009)

訳書にバイコフ『偉大なる王』(文藝春秋社，1941，新潮文庫 1952)，エメリヤン・クリンスキー著『歌うドン・コザック』(アート・フレンド・アソシエーション，1956)，ドウロフ『サーカスの動物ものがたり』(日月社，1958)

こそが、発表の場所を失った長谷川にとって創作の場のすべてだったといっていいかもしれない。

このノートは、長谷川濬が亡くなったあと次男長谷川寛が大事に保管していた。長谷川は一九五二年から亡くなる一九七三年までノートを書きつづけていた。寛のもとにはおよそ百三十冊のノートが残されていた。私は拙著である神彰の評伝『虚業成れり』の取材中に、寛からこのノートの存在を知った。寛は父がこのノートで神彰について書いた部分のコピーを提供してくれた。アート・フレンドの元同僚や部下たちが知らない神彰の姿がそこにあった。

これを書き残した長谷川濬のことが知りたくなり、『虚業成れり』を上梓したあと、寛と何度か会い、長谷川濬の取材が始まった。何度目の取材だったか定かでないが、ノートを全部読みたいという私の申し出に対して、寛は承諾し、何日後かに段ボールに詰め込まれたノートが届いた。B5判の大学ノートには、きれいな字で、詩や小説の下書き、創作ノート、本や映画、芝居の感想、日記、随想、スケッチなどが、ぎっしりと書き込まれていた。

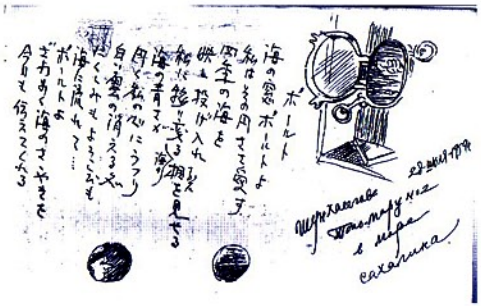
彼は戦後およそ八十編近い文学作品を同人誌に発表しているが、すべてこの「青鴉」から生まれたものであった。さらに、このノートには満洲時代の回想、妻文江や子供たちへの思い、亡くなった子供たちや友人たちへの哀悼、自分への叱咤、激励など、彼の真情が余すことなく綴られている。

薄明の空に飛び立つ「青鴉」のイメージ

長谷川濬と交流をもった人たち、例えば劇団文化座代表佐々木愛は、「いつもウォッカとサラミをぶら下げてやってきて、飲むとロシア民謡を歌うんですね、そう大陸浪人のような方でしたね」とふり返っているし、アート・フレンドの後輩にあたる康芳夫も、「神彰よりスケールが大きい男だったんじゃないか」と思い起こす。戦後政治のフィクサーとなる田中清玄は函館中学で同期だったが、一番馬が合ったのは濬だったと回想している。このように素浪人の如く豪放磊落なイメージがぴったりする長谷川であったが、この「青鴉」の中での彼はナイーブで傷つきやすい魂をさらけだしている。

満洲崩壊と共に死んでいった友たち、そして引き揚げ途中に病死した幼き娘への鎮魂、戦後就職もできず、さらには結核のため何度も入院生活をおくるその不遇を嘆き、年を重ね、入院することが多くなる中で強まる死への恐怖、幼くして亡くなった長男満の死に対して、自分が死なせたという後悔、妻文江への愛、弟四郎への恨みなども赤裸々に長谷川は繰り返し書きつづけた。

寛や長女嶺子は、家庭の中での父は、



ノート「青鴉」より

いつも明るく気さくに映画や音楽の話をしてくれたことを思い出している。就職もせず、豪放磊落、飄々と生きていた長谷川であったが、ナイーブで傷つきやすい一面ももっていた。相反するようなイメージを重ね合わせていくと、長谷川濬という男の実像が浮かびあがってくるようだった。最初の一冊のノートが書かれたのは、一九五六年七月なのであるが、その巻頭に「青鴉」と題された詩がある。

「吾
薄明の空に
青鴉の
一羽
すみやかに
とぶを見たり
ただ
一度
それだけ……。」

さらに、ノートの裏表紙には、こんな一節も記されている。

「死ぬことを止めよ！　生きて、生きて、血を流せ。
青鴉よ！　君の胸に止まれ！　虚妄の虹よ、永遠に」

鴉の象徴ともいえる「黒」を「青」にしたところに、長谷川の思いがあったはずだ。薄明の空に、飛び立つ青鴉のイメージには、生と死の間の永遠の真実、それをつかみ取ろうとすると、消えてしまう、そんな儚い幻の姿が、仮託されているような気がする。

（おおしま・みきお／サーカス・プロモーター）

満洲浪漫
長谷川濬が見た夢
大島幹雄
四六上製　三五二頁　二九四〇円
口絵四頁